
灰色魔女

虹乃 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色魔女

【Nコード】

N0581Q

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

『あなたの願い 叶えましょうか？ - 灰色魔女クレア -』
ある小じんまりとした家に美しい魔女がいる。

彼女は、その願いに見合った等価を払った者に対してだけ願いを叶える。

何のために彼女は願いを叶え続けるのか？

時々シリアスでも基本は、ほのぼのファンタジーなお話。

よかったら見てってやって下さい。

心優しき男（1）（前書き）

ほのぼのさっ、きつと

心優しき男（１）

『あなたの願い　叶えましょうか？ー灰色魔女クレアー』

森の奥に小じんまりとした小さな家がある。

カインは家のドアに貼ってある紙を不安そうに見つめる。
そして何故ここにいるのだろうと考えた。
確か考え事をしていて村の外れにある森をうろついていた、道も
分からなくなつた時この家が見えたのだった。

とりあえず道を聞こうとカインは中へ入った。

「あの、すみません。道に迷ったのですが…」

ドアを開けて中に入ると驚いた。外から見ると天井も低い古びた
一軒家だと思つたが中はとても広い。壁には全て本棚が設置してあ
り天井高くまで連なっている。天井があまりに高すぎて先が見えな
い程だ。

「いらつしゃい」

呆気にとられていて暖炉の前の椅子に人が深々座っていることに
気がつかなかった。

「どうぞ、おかけになって」

暖炉の横には十人が座っても余るテーブルがあった。

椅子に座っていたのはいかにも魔女らしい黒い服に防具。だがそれを身に付けているのはカインよりも若い二十前後の女だ。

「何か悩み事ですね。私はクレア、どうぞお見知りおきを」

「い、いえ、悩み事なんて。道に迷っただけなんですが」

そう言いながら少しだけ興味を覚えて椅子に座った。

「あの、何故灰色魔女なんですか？」

クレアが暖炉から移動してテーブルを挟んでカインの真向かいの椅子に座り、見つめた。

「白と黒の魔女や魔法使いがいるのはご存知でしょう」

「え、はあ……」

「黒は人を不幸や恐怖を与える、白は人を幸せにするものだ知っているでしょう」

「まあ、そうですね」

「けれど黒は主を喜ばせ白は他の人を不幸にすることもあるの」

カインが首を捻りながら曖昧に頷く。

全く分かっていないのがはっきりと伝わった。

「まあ、要するに黒の中に善があり善の中に悪がある、ということですよ」

「だから灰色魔女なんですか」

「でもそれはどの魔女も魔法使いも同じですよ」

不意にクレアがじつとカインを見据えた。

「あなたの願い、叶えましょうか？」

カインがその瞳を見つめる。だが何の感情も見えない。

「その、お代とか…」

「あなたの願いに見合う物で充分です」

「でも…お金が無くて」

カインが暮らす村は国の税がひどく厳しく毎日の生活もままならないのだ。

しょんぼりとカインが肩をおろす。

「別に何でも良いのです。それが金でも物でも人でも。あなたの願いと等価であればよろしいのです」

この発言にゾクリとした。

つまり、その願いと等価であれば善悪関係なく叶えてやるという

ことか。

「…ちなみに今まで何人の願いを叶えましたか？」

「まだ50もいつてないでしょう。皆さん、等価をお持ちではなかったのです」

残念そうに聞こえるが顔は眉一つ動いていない。

「それで、あなたの悩みはどうしますか？」

「どうして悩みがあると？」

「ここに辿りつくのは悩みを抱える人だけです」

それで、と促された。

「…好きな女ひとがいるんです。だけど想いを伝えられなくて…今度、彼女の誕生日で何をあげようか、その…迷っているんです」

クレアが手元に置いてある水晶玉を覗く。

「おや、美しい方ですね」

カインが水晶玉を覗き込むが自分の顔しか映っていない。

「名をクリスですか。皆に慕われていて元気な方ですね…おや？」

水晶玉を覗き込んでいたクレアが顔を上げてカインを見つめ目を

細めた。

カインは黒い黒曜石のような瞳に何もかも見透かされているように感じた。

「あなたの願いを聞きましょう」

黒い瞳がカインを貫いた。

心優しき男（1）（後書き）

色んなジャンルに挑戦する、それが私だ！

どっかの作品が終わってからにしろとか言わない お約束

だって書きたかったんだもん ハタ迷惑

心優しき男（2）

「あなたの願いを聞きましょう」

「クリスが、僕を…好きに…」

カインが言葉を途中で切った。

「・・・いえ、いいです」

クレアがぱちくりと眼を大きく見開いた。

外見に似合わず子供っぽい仕草にどきり、とした。

「いいのですか？クリスがあなたに目をくれなくとも」

「それは悲しいですが…けれど人の心を勝手に変えてはいけな
と思います」

それでは、何か吹っ切れたように立ち上がる。

「少し、お待ちを」

クレアが棚から何かを取り出してカインに手渡した。

「これは紅茶です。私のお気持ちですよ、どうぞ」

カインが顔を上げるとクレアは優しく微笑していた。
それはカインが思わず魅とれてしまうほどの美しさだった。

「あ…ありがとうございます」

赤くなりながらも受け取った。

「それで道は？」

「大丈夫。このまま道なりに進めば良いのです」

カインがドアを押して出る。

「その紅茶は彼女に淹れてあげなさい。きっと喜ぶでしょう」

カインが我にかえって振り返ると家が消えている。

幻だったのか、だが手には紅茶が入っている包みがある。

カインはこのままクリスの元へ行こうと道を走って行った。

カインが森から出てクリスの家に行くとクリスは洗濯物を取り込んで
いる所だった。

「クリス！」

カインの声にクリスが振り向いた。

「どうしたの、カイン？そんなに息を取り乱して」

「っはあ、君に、紅茶を淹れさせて、くれないか？」

息を乱しながら一気にカインは言葉を紡いだ。

きょんとしたクリスだったが明るく笑い、いいわと言う。

二人で椅子に座ってカインがカップに紅茶を注いだ。

「いい香り。…それに綺麗な色ね」

それは初めて知る紅茶。何かの花の甘い香りに淡い桃色の紅茶だ。

「まあ、おいしい」

その笑顔で真っ赤になったがカインが勇気を持って言う。

「ク、クリス！僕と、結婚してくれ！！」

クリスが眼を見開きカインをじっと見るとクリスも顔が赤くなった。

「…はい」

二人は静かに見つめ合った。

その様子を見ていた一人の魔女。

「二人が愛し合っているのは分かっていたけど、あの男には勇気がなかったただだったのね」

カインに渡したのと同じ紅茶を飲んで一息つく。

「あんな男もいるのね…心優しき人間も。予想外だったわ」

フツと微かに笑った。

だが、と思う。

もしクリスがカインを想っていないなくカインが好きになるように願ったらー。

カインが等価を払えば叶えてやっただろう。
クリスの心を曲げてでも。

だから私は灰色魔女。

・コンコン

「すみません、道に迷ったのですが」

悩め人が来たようだ。

「あなたの願い、叶えましょうか？」

あなたも願いがあるならおいで。
灰色魔女が叶えてあげる。

心優しき男(2) (後書き)

どんどん焼きを

我が地方では今日やるのです

だがこんな寒い中出ていけるか!!

私は絶対にいかん

緑黄の黒き猫（前書き）

ほのぼのですね

緑黄の黒き猫

『あなたの願い 叶えましょうか？ー灰色魔女クレアー』

赤い屋根の小じんまりとした家に一匹の黒猫が扉を前足でかいて
いる。

すると、扉が開いて猫が促されるようにするりと入った。

「いらっしゃい」

暖炉の前で椅子に座って本を読んでいる女が顔を上げた。

「可愛いお客ね。私はクレア、あなたは？」

その一言に猫がニャアと鳴く。

「初めまして、クロウ。どうぞ、座って」

クロウが椅子の上に丸くなった。

「それで、あなたの願いは？」

クロウが目を細め今度は長く鳴いた。

「あなたの主人が亡くなってしまつて悲しいわね。そう、だから主人を生き還らせて欲しいのね」

クレアが溜め息をつく。

「クロウ、人には寿命があるのよ。もちろん、あなたにもね。分かるでしょう」

だがクロウは悲しそうに鳴く。

「あら、あなたは普通じゃないの？なら、私と同じね」

クロウが視線をクレアと合わせた。

「私は魔女よ。人より寿命がとても、とても長いの」

左右違う色の眼を持つ黒猫は視線を逸らさないでいた。
右目は薄い緑色、左目は柔らかな黄色の瞳だ。

「綺麗な瞳ね」

クレアは目を細めた。

だが急に鋭い視線を送った。

「主人を生き還らせたければ、それに見合った等価を。クロウ、どうしますか？」

二つの瞳が不安げに揺れる。

「等価というのは、あなたの願いを叶えるための料金。あなたにお金は無理でしょう。だから、その分は物でもいいから願いに見合った物を私に」

さあ、どうする？

クレアが薄く笑った。

クロウの身体は固まった、だが瞳はクレアの視線に捕らわれている。

クロウが掠れた声を出した。

「等価？それはあなたが願いを叶えたいと言っなら教えましょう」

優しげな口調だが威圧感は拭えない。

やがてクロウが返事をした。

「そうね、それがいいわ」

クロウが椅子からそつと降りて家から出ようとした。

「クロウ」

クレアが呼びとめた。

「良かったら私と一緒に暮らす？」

クロウが戸惑いながら振り返った。

「いいなら、いいわ。それじゃ、さよなら」

扉が自然に開かれた。
クロウが外を見る。

だが戻ってクレアの足にすりより甘えた声を出した。

「そう、よろしくね。クロウ」

クロウを優しく持ち上げ膝の上にのせる。

「そこがあなたの寝る所ね」

バスケットに柔らかそうな布が入っている。クロウの寝所は暖炉の近くだ。

「はい、あなたの主人がくれた鈴」

錆び付いている鈴をクロウの首につける。

「クロウ、あなた無くしてしまっていたでしょう。今日から同居するあなたにささやかなプレゼントよ」

クロウが膝から飛び降りて嬉しげに首を振る。

・チリン、チリン

「気に入ったのね、良かった」

黒い猫はその日一日中鈴を鳴らしていた。

緑黄の黒き猫（後書き）

うふふ、田舎の我が家では雪が今日降ったのです

雪だるまを作ろうと思ったのですが雪ちゃんの

肌が極め細やかだったため固まらず挫折いたしました

わがままな大男（１）

『あなたの願い叶えましょうか？ - 灰色魔女クレア - 』

家の茶色い扉に貼ってある紙を屈んで目を細めながら見ている大男がいる。

少し迷っていたが扉を叩いた。

「どうぞ」

中から若い女の声がする。

「すまんが入れないのだ」

その声に扉が開き黒い服の魔女が出てきた。

「・・・あら、大男でしたの。ではあなたを少しの間小さくしましよ
う」

女が指を鳴らすと大男は村人よりも少し大きい程になった。
戸惑っている大男に部屋に入るよう促した。

2人は椅子に座り、木で作ってある机を挟んで向き合った。

「私は灰色魔女クレアです。大男さん、あなたの願いは？」

「叶えてくれるのか!？」

身を乗り出す大男に静かに言い放つ。

「等価を払って下さるなら」

「等価？」

「あなたの願いに等しい料金のようなものです。それが物でも人でもお金でもいいのです」

少し黙っていた大男だが、ゆっくりと口を開いた。

大男には自分の城があり四季折々のみごとな花が咲く美しい庭がある。

ところが近所の子供達が大男の庭で遊んでいる。

来るな、と何度も口を酸っぱくして言っているが自分のいない時に庭で遊んでいる。

「儂の庭は儂の庭だ!！」

「まあ、そうですね」

さほど関心が無さそうにクレアが紅茶をすすりながら答えた。

「子供達が儂の庭に入れないようにしてくれ!それが儂の願いだ」

その瞬間、クレアが恋をしたように甘く笑った。

大男はクレアを見て放心したように固まった。

「では等価を言いましょう。あなたの庭に子供達が来るでしょう。その中で最も小さい子供を捕まえて箱の中に入れ私に渡しなさい。そうすれば、あなたの願いを叶えましょう」

まだ放心から立ち直れない大男に話し続ける。

「その子を捕まえたら箱を持って庭で『等価を用意した』と言いなさい。そうしたら私が行きましょう」

大男は微かに首を動かしながら誰かに操られているように外へ出た。

大男がはっとして後ろを振り向いたが家は消えていた。

大男が城に帰るとやはり子供達が庭で遊んでいる。

だがそつと物陰から子供達の様子を伺いながら一番小さい子供を探した。

低い木を登ろうとしているが背が小さすぎて届かず泣いている小さな小さな子供がいた。

そこへ大急ぎで走っていくと子供達が大男に気付き散り散りとなつて逃げ回り始めた。

だが小さな子供は泣いているため気がつかず大男にあっさり捕ま

った。

小さな子供を粗末な箱に入れて庭に立ち大声で叫んだ。

「灰色魔女、等価を用意した！！」

すると大男の足元にすぐさまクレアが現れた。

「意外と早かったですね」

大男から箱を受け取り詩を紡ぎ出した。

庭の周りに塀ができ

塀は高くて人や鳥には越すことができない

塀は堅くて人には壊せない

超えられない

ここは大男の庭

入る子供は誰もいない

すると大男の庭にレンガの塀ができ、その高さは大男よりも高かった。

「では私はこれで」

感激している大男に背を向ける。

「そ、その子供はどうするんだ」

振り返らずにクレアが答える。

「等価として子供を差し出したあなたには関係のないこと」

そう言つて大男が瞬きをしたと同時に消えた。

大男はそんなことをすぐに忘れ自分の庭に子供達が入って来ないことに喜んだ。

冬が来て大男の庭に雪が積もった。

そして春、どこもかしこも庭には美しい花が咲き始めるようになった。

だが大男の庭には春が来ない。ずっと冬のままだ。
雪と霜は喜び雪は草に白いコートをかけ霜は全ての木を銀にした。
雪と霜は北風に来るようにいった。そして霧に来るように頼んだ。
大量の雪が大男の城の屋根に積み重なれ、その重みで城は壊れてしまった。

けれども冬はまだ続く。

その様子を二対の眼が覗く。

「だから言っただでしょう」

「・・・」

クレアと小さな子供が大きな鏡を覗いている。

「まだ旅立たないのですか？」

「もう少しだけ」

「旅立つ時には声をかけてください。渡したい物がありますから」

「本当にお前は灰色だな」

彼は少年らしかぬ声を吐き捨てた。

わがままな大男（1）（後書き）

これは、どっかの童話から抜粋したものなんですけどね
勝手にアレンジ

わがままな大男（2）

「どうしてなんだ、なぜ春が来ない」

大男の服は灰色になり、吐く息は真っ白だ。

だが冬はまだ続く。

子供たちがいた時は、草木も楽しそうに揺れ小鳥の美しい歌声も聞こえていたのに。

「・・・子供？」

そうだ、子供たちがいたから、この庭に春が来ていたんだ。子供たちがいたから儂の庭は美しかったのだ。

だが塀を見上げる。

「儂が望んだことだ、しかし」

そう呟いて塀を軽く叩く。すると簡単に塀が壊れた。

大男は喜々として次々と周りの塀を壊し始めた。

全ての塀を壊した後、雪が吹き荒れている中、寒々と眠った。

朝、眼を覚ますと良い香りが鼻をくすぐった。

「ついに春がきたのだ」

大男は飛び起き辺りを見回した。

大男が見たものは木の上にいる多くの子供たちだった。
木には多くの花が咲き乱れ、小鳥たちが楽しそうにさえずっている。

ああ、春がきたんだ。

だが向こうの隅でまだ雪が積もっている木が一本だけあった。
その木に小さな女の子が登ろうとするが枝が高い位置にあるため届かない。

大男はそつと小さな女の子を木の上にのせてあげた。
すると木が被っていた雪は溶け、美しい花が咲き始めた。

その時、大男の心もゆつくりと溶け始めた。

「ああ、なんてわがままな男だったんだ」

そして大男に怯えている子供たちに言った。

「今から、この庭は子供たちのものだ」

それから子供たちが自由に来るようになり、それまで彼らが見たこともない美しい庭へと変わった。

大男は子供たちと遊び、子供たちがこの世で一番美しい花だと分かった。

だが一方で、はしゃいでいる子供たちを見ると魔女に差し出した小さな男の子のことが気にかかった。そのことを思うと大男は悲しくなった。

「そろそろか」

「あら、もう行くのですか。ならば、これを」

クレアが白い花と花の冠を小さな男の子に渡す。

花の冠は金色で輝く花で作られていた。

「お前は私を畏れはしないのか」

クレアが微笑する。

「やはりお前は灰色だ。あの塀は人には壊せぬが大男には壊せるよ

うに魔法をかけて」

「自らがつかなければ、そのままでしたよ。ずっとわがままであったならば」

「厳しいな」

「灰色魔女ですもの」

そうだな、と少年が苦笑する。

「でもあなたも灰色ね」

ぴくりと少年の動きが止まった。

「大男は連れて行ってもらえて幸せね。けれど残された子供たちは？」

「・・・」

何も言わず少年は扉を開ける。

「また来て下さって構わないわ。楽しい話を聞かせて下さるなら」

パタン、扉が静かにしまった。

大男も歳をとり、子供たちと遊ぶことができなくなっていたが大男は庭に椅子を置き子供たちを穏やかに見つめていた。

子供たちが帰ったため自分も城に戻ろうとしたが庭に小さな男の子が微笑みながら立っているのが見えた。

大男はすぐにその男の子に気付いた。

あの子は儂がわがままだった時に魔女に売り渡した男の子だ。

「ああ、すまない。儂が愚かだった。魔女に何かされていないか」

男の子の元へもう自由に動かない重たい身体を引きずって駆け寄った。

「今の君の心はとても美しい。君が昔の自分を改めたのならいいんだよ」

男の子は柔らかに笑った。

大男は訳も分からなかったが何故か男の子に畏敬の念を抱いた。

頭の上に黄金の、大男が見たこともない美しい花冠を被っている男の子はさらに笑みを深くして近寄った。

「この冠で私の庭も美しくなるだろう」

大男は男の子の前に跪いた。

そして大男に向かって少年は優しく言った。

「君は子供たちにこの庭で遊ばせてあげた。だから私も君を私の庭

に招こう」

少年は大男の手をとった。

次の朝、子供たちが大男の庭に遊びに行くと大男が木の下で冷たくなっているのを見つけた。

大男は微笑みながら安らかに眠っていた。

大男の上には白い、雪よりも真っ白な花がいくつも覆い被さっていた。

子供たちが泣いているのが映っている鏡をクレアは静かに見つめていた。

「まあ苦しんで死ぬよりはいいものだけど」

それに同調するようにクレアの膝元でクロウが鳴いた。

「クロウ、今まで隠れていたわね」

クロウはしらんぷりで欠伸をする。

「あそこはきつと美しい場所でしょうね。・・・どんな場所かしら」

無機質な声だったがクロウは顔を上げクレアを見つめる。

「分かってるわ。私はあの場所には行けない。・・・だって灰色魔女ですもの」

わがままな大男（2）（後書き）

ああ、集中力が途切れますたわw
誰か我に集中力を与えよー

歌が好きな女（１）

ああ、どうすればいいの。大切な私の娘。ああ、神様どうかこの娘だけでも。

まだ５歳にもならない子供を抱え若い女が広い敷地内の林の中を息を切らしながら我夢沙羅に走っている。

どうせ捕まってしまうだろう。しかし、この娘^こだけでも門の外へと出せば誰かが助けてくれるはずだ。

助けてくれることを信じよう。

どの位走っただろう。

「も、もう、そろそろ、着いても、いいはずなのに」

息苦しさに胸を押さえ目を瞑って大量の空気を吸い込んだ。

ようやく落ち着いて顔を上げるとすぐ先に見知らぬ小さな赤い屋根の家がある。

「あんな家、ここにあったかしら」

だが救いを求め家に足を運んだ。

『あなたの願い叶えましょうか？ - 灰色魔女クレア - 』

家の扉に貼ってある紙を見つめる。

「魔女・・・？」

そんなものは夢物語だ。

だけど、願い、我が子の安らかな寝顔を見つめ決心する。

「ごめんください」

ぐぐつと音がする扉を押した。

外から見た時はただの一軒家だと思っていたのに中の余りの大きさに開いた口が塞がらなかった。

天高くまで本棚が周りを囲っている。

部屋が薄暗いためにこの本棚がどこまで続いているか見ることができない。

「キャア！」

そのせいか、足元を黒い猫が通ったことに気づくのが遅れ悲鳴を上げてしまった。

「駄目でしょう、クロウ。ごめんなさいね。どうぞ、お座りになって」

その声にはつとずる。いつの間にか黒猫を抱き上げ、すぐ近くにいた女を見つめた。

女はゆっくり椅子に座り自分にも向かい側の席に座るよう促す。

「今はパンしかありませんの。紅茶とパンでもどうぞ」

・食べ物、今日はまだ何も食べていなかった。

「毒なんか入っていませんよ」

「そんなっ！」

そんなことなど思っていないのに。

全身を黒い服で覆い、後ろの背景に溶け込んでしまう程の漆黒の髪。どの女性も羨ましがる程に美貌だ。

なるほど確かに魔女だ、と思いながらも若い女だと思う。
そんな表情が出ていたのだろうか。

「それでもあなたより年上ですよ」

顔の表情を一切動かさないで言われた。

「私は灰色魔女クレアです。可愛らしいお子さんで」

クレアの声聞きながらぎゅっと娘を抱きしめ椅子に腰を下ろし紅茶を飲み干す。

朝から何も飲んでいない上にずっと走り続けていたために喉がからだったのだ。

「おいしい」

「ありがとうございます」

しばらく沈黙が漂う。だがクレアと名乗る魔女は自分も紅茶を美味しそうに飲むだけだ。

「あ、あの、願いを叶えてくれるって、その、本当でしょうか」

「ええ」

だが相手は魔女だ。きっと何か無理なことでも代償にさせらるの
だろう。

「・・・」

「あなたの願い、叶えましょうか？」

先ほどまで何の興味を示さなかったが視線をいきなり合わせた。
クレアの視線に捕われた。

「・・・何が必要なんでしょう」

クレアが肯定するように謎めいた微笑を浮かべる。
女性でも見惚れる麗かんばせしい顔なのに何故か背筋が凍る。

「それは？」

「あなたの願いに見合うものを」

「な、なら！私に、この子だけはどうか！！」

驚いたようにクレアが目を見開く。

その時が始めて彼女の人間らしい部分を見た気がした。

「別にとって食べようなんて思ってたませんよ」

その言葉でやっと自分の失言に気づいた。

「切羽詰まったようでしたね。どうかなさったんですか？」

相手は魔女なのに久しぶりの優しい言葉に涙が目尻に浮かぶ。

「す、すみません」

「いえ、若いのに大変でしたね。私でよろしければ話を聞きますよ」

「ありがとうございます。私はソーラージュ、この子はカティア」

どう見ても自分の方が上だと思うのに年寄り染みた言葉にちよつとだけ心が和んだ。

歌が好きな女（1）（後書き）

ぬぬぬ、そろそろパソコンとおさらばしないと。
中毒になってしまっわー

歌が好きな女(2)

ソラージュは話し始めた。

ソラージュは町一番の歌姫だった。その歌声を買われ子爵の屋敷に招かれ歌声と舞を披露した。

子爵はソラージュの美貌と歌を気に入り手元へおくようになった。ソラージュに優しくしてくれ今まで出されたことのない豪華な食事を味わうようになった。そのためソラージュも子爵に恋慕を寄せるようになったが子爵にはただの暇つぶしだったのだ。

しかしソラージュは子爵の子を身ごもり、その子を産んでしまったために大変なこととなった。

子爵の母親は怒り、ソラージュとその子を殺そうとした。

だが子爵の乳母が「今は巡回使がこの町を強化して見回っています。万が一、ここの子爵様がやったと見聞されれば終わりです。それより、ここに閉じ込めゆつくり殺した方がいいのでは」と言っソラージュとカティアを閉じこめた。

「違います。ロジエルさんは私たちを助けてくれたんです。今日もこっそり外に出してくれたんです」

乳母、ロジエルは味方でソラージュたちに協力してくれた。

「それで逃げてきた、と。大変な人生ですね」

「はい。・・・どうか、クレアさん私たちを助けてください」

クレアが紅茶をすすりながらカティアを強く抱きしめているソー
ージュを見つめる。

「その子爵とやらは、もう愛していないのですか？」

「ええ、これっぽっちも！！あの男、私のカティアが生まれたとき
から一度も私たちに会いに来なかったんです」

あまりの興奮ぶりにカティアが泣きそうな顔をして目を覚ました。

「あ、ごめんなさいカティア。起きてしまったの？」

「母様、この人は？」

「こんにちわ、カティア。私は灰色魔女クレア。今、お母様と大事
な話しをしているの。このクロウと遊んでやってくれるかしら」

クレアが驚いて毛を逆立てている黒猫をカティアに渡した。

カティアはソーージュの膝から下りてクロウを力一杯撫で回し始
めた。クロウの必死な泣き声が聞こえる。

その様子を穏やかに見つめているソーージュに言う。

「あなたの願いは子爵から逃げて2人で静かに暮らすこと、でよろ
しいですか」

「え、ええ。ですがロジエルさんたちにはお礼を言いたいのです」

「分かりました。．．では、お代を頂きましょう」

その言葉にソーラージュが服のポケットから2、3個の宝石を取り出す。

「子爵から盗んだ物です。．．．これでは、足りませんか？」

輝く赤、黄色、青色の宝石。庶民なら当分の生活に困らない程度だろう。

だがクレアは首を振り、ソーラージュの手にその宝石を握らせる。

「これは2人が生活するのに必要な物ですよ」

「じゃ、じゃあ」

クレアが人差し指をトン、とソーラージュの首に突きつける。

クレアの手は死んだ人のように冷たく、ソーラージュは息を呑んだ。

「あなたの歌声を、町一番の歌声を頂きましょう」

「う、歌声？」

「ええ、そうです。歌声を下されば、あなた方2人を彼らから逃がし、お世話になった人に子爵たちに見つからないで会えるようになります」

もう歌えなくなる、それは悲しいこと。けれど逃げるためには仕方がないこと。

「・・・分かりました」

では、クレアがソーラージュの首元に指をつけながら呟く。
ソーラージュには分からない詞ことばだったが、きつと歌声がとられているのだろう。だが痛みのないのが幸いだ。

「終わりました。歌ってみてください」

何か歌おうと喉を振るわせるが声は出ず、口が閉じたり開いたりするだけだ。

「では、あなたたちに魔法を」

クレアが立ち上がりソーラージュを見下ろす。

「い、痛くないですか？」

「あっという間ですよ」

クレアが自らの赤い熟れたような唇をソーラージュの額につけ目をつむる。

クレアの唇は手と同じようにひんやりとしていて、身を震わす。

「はい、終わります」

確かに痛みも何も感じなかった。感じたのはクレアの唇の冷たさとクレアから漂う香のような甘い香りだけ。

何も変わっていない自分の姿を見つめ、呆然としているソーラージュを見ずにクロウと遊んでいるカティアに近づく。

「少し目を瞑ってくれる？」

ギョツと目を瞑るカティアに微笑みながら先ほどと同じように唇をカティアにつける。

「どうぞ2人とも。もう大丈夫です」

「これで大丈夫なんですか？」

「ええ、さあ家を出て道を通り直ぐ行けば子爵の屋敷の外ですよ」
安心できないがクレアの言われた通りにすることにする。

「ありがとう、クレアさん」

「2人に祝福がありますよう」

「ばいばいクロウちゃん、またね」

カティアが舌足らずの話し方で毛並みがぐしゃぐしゃとなった黒猫に手を振って母親と一緒に家を出た。

「また、がないことを祈ってますよ」

閉じた扉の向こうから放たれた言葉には気がつかなかった。

家を出て一本道を歩いていると確かに子爵の屋敷の門の前だった。

驚き、後ろを振り返るがあるのは見知った道だけ。クレアの家は
跡形もなかった。

屋敷の中は何やら騒々しい。

門の近くに立っている男に話しかける。

「何かあつたんですか？」

薄汚れた服を着ている男が振り返って応えた。

「ああ、何か若い女とその娘が逃げたそうだぞ」

全身から冷や汗が出た。

どうしよう、早くこの場から逃げなくてはいけないのに足が動かない。

けれど、どうにかしてカティアの手を引いて離れようとした。

だが門から離れようとした時、屋敷からあの子爵が出てきた。彼の
目にはしっかりとソーラージュとカティアが映っている。

子爵は苛立ちながら、こちらに近づいてきた。

「おい、その薄汚れた老婆と男、若い女と5歳の女を見なかった
か！？」

彼は確かにソーラージュに向かって言ったのだ。

「え・・・」

「知らないかと言っている！！」

「い、いえ」

そして子爵は苛立たしげに屋敷へと戻っていった。

門の外にいた男は今のやり取りに困惑している。

「何だ、今の男。この女は若い娘じゃないか・・・？」

ソラージユも驚きを隠せない。

「あのお姉さんのおかげ？」

「・・・そうね」

服の裾を引っ張るカティアを見つめる。

「ソ、ソラージユ！！カティア！！」

ロジエルが2人を見つけて血相を抱えて門へかけより門から手を出してソラージユの頬へ触れる。

「良かった、ああ、本当に良かった」

ロジエルが大量の涙を出す。だが、はっとして涙をエプロンでふいた。

「ソラージユ、早く逃げなさい。旦那様が来るわ！」

「大丈夫なの、ロジエルさん。私、あの人には老婆に見えるみたい」

「え？」

「魔女さんに魔法をかけてもらったの。これで私たちは静かに暮らせるわ。ロジエルさん、今まで本当にありがとう」

ロジエルは何か言いたそうだったがソーリュの幸せそうな笑顔を見て言葉を飲み込む。

「私、この近くに住むわ。住む場所が決まったら私たちを助けてくれた人たちに来てもらうわ」

「ええ、それじゃあその時に話を聞かせてちょうだい」

ロジエルが笑って屋敷へ戻って行った。

「そろそろ行きましょう、カティア。私たち、住む場所を探さなきゃ」

カティアの手を握りながら屋敷に背を向けた。

「ねえ母様、子守唄を歌って」

「カティア、母様はもう歌えないわ」

「嫌よ、嫌。私、聴きたいもん」

駄々をこめるカティアに仕方なく口を開く。

歌えるはずがない、そう諦めながら歌声を出そうと口ずさむ。すると、歌声が出てきたのだ。

「・・・え？」

別の歌を歌おうとするがやはり声が出ない。

「・・・子守唄だけ出る？」

ソラージュは空に向かって笑い、美しい歌声で歌う。
その歌声に誰もが聞き入る。

だけどソラージュはこの歌をクレアに聞かせたいと思った。

「美しい歌声」

クレアの家には暖炉の上に置いたピンク色のオルゴールから美しい歌が流れてくる。

横顔の着飾った男性が美しい女に化けた妖精を求める絵柄だ。
甘い歌声とよく合う。

「ねえクロウ、そう思うでしょう」

ブスツとした黒猫がそっぽを向く。
毛並みが見れたものではない。

「機嫌をそろそろ直してちょうだい」

クロウが不機嫌に鳴く。

「甘い？・・別にいいのよ。子守唄なんて必要ないもの。それに私は気まぐれが多いの」

多過ぎだ、とクロウが鳴いた。

「いいじゃない。2人とも新しい生活が始まるのよ。カティアはまだ5歳、可愛いわねえ。私も子供でも産もうかしら」
可笑しそうにクロウが顔を歪ませる。

「クロウ、私に相手なんかいないくせにって思ったでしょう」

クロウがさっと逃げた。

「家から放り出してあげるわ」

オルゴールが楽しそうに1人と1匹を見守る。

死にたくない男（１）

「死にたくない」

ぶつぶつと独り言を言っている眼が血走った男が霧の中歩いていった。

霧は濃く前が全く見ることができない。
暫く歩いているとやがて霧が晴れた。

その先に赤い屋根の小さな家が見えた。

そこに救いを求めるように男が生気が無いようにふらふらと吸い寄せられる。

『あなたの願い叶えましょうか？ - 灰色魔女クレア - 』

- 願い、その字を穴が開くほど見つめ、そつと扉を押す。

中は暖炉の火と蝋燭の火だけなため薄暗かったが、中はかなり広いと分かった。

「いらつしやい」

暖炉の前に座り膝に黒猫を乗せている若い女が振り返った。

若い、そして見たこともない美しさだ。

「椅子にどうぞ。私は灰色魔女クレアです」

男は静かに、だが目はクレアに合わせながら座った。
ぎよろつとした眼がクレアの一動作ごとに動く。

「あなたの願い、叶えましょうか？」

男の目は虚ろなままだ。

「私は浦戸、浦戸。・・・死にたくない、死にたくない」

どうやら再び自分の世界に閉じこもってしまった。

「そうですか。あなたは病で命も後僅か、生きようと若い女の生き血を浴びるが一向に治る気配がしない、と」

無表情で残酷な言葉を発するクレアに浦戸が反応した。

「そうだ、もう100人以上の血を・・・若い女の血を浴びているのに・・・助けてくれ」

「ならば等価が必要です」

「と・・・う・・・か？」

「あなたの願いに見合う料金を。それがお金でも人でも物でも」

「それで、私は助かるのか？」

クレアがゆつくりと一拍置いて謎めいた微笑をする。

「あなたの願いは病を治すことなんですね」

「ああ、ああ・・・そうだ。永遠の命、私は、死にたくない」

「ならば等価を言いましょう。この世界に魔界へ続く道があります。そこに行き洞窟の中に咲いている黒色の花を根ごと積み私の名を呼びなさい。そうすれば病を治してあげましょう」

ただし、と続ける。

「あなたがその花を摘まなくてはなりません。そうでなければ等価ではありません」

クレアが言い終わると浦戸は自分の意思とは関係なく勝手に足が動き家からふらふらと出た。

出た瞬間、後ろを振り返ると家は消えていた。

暫くそこに佇んでいたがいつの間にか自分の見知った道を歩いていくと自分の屋敷が見えた。

この屋敷は世間から幽霊が住む家と言われている。屋敷は街から離れていて、広く大きいのだが周りは木に囲まれていて霧が多い。そのため年中薄暗く近寄る人はいない。

浦戸はそんな屋敷の主人である。

病になる前に海外との貿易で一儲けをして家を建てたのだ。

浦戸は屋敷中の人間を集め、掠れた声を出した。

「この中にどんな些細な馬鹿話でもいい。どこかで魔界に行ける話を聞いたことはないか？」

周りがざわつく中、青い顔をした女中が叫んだ。

「浦戸様、魔界は死んだ者だけが行くと言う・・・」

「なに、死んだ人間しか行けないのか」

「い、いえ・・・あの、私が聞いた話ですと××県にある××村から行ける、と」

「その村から行けるのか」

「はい、確か古びた真っ黒い鳥居がある処だと」

「そうか、では皆、職場に戻れ」

浦戸は自室に戻った。今日は結構歩いたため身体が疲れている。

「今日は疲れたな」

すると物陰からずっと2人の男が出てきた。

2人とも図体がでかいが無表情で何も話さず不気味な雰囲気醸

し出している。

「お前たちに今まで若い女を殺してもらっていたがもう充分だ。永遠の命が手に入る。明日、××村に付き合ってもらおう」

従順な2人はただ静かに頷いて従う。

死にたくない男（1）（後書き）

寒いっすねー・・

うちの方、雪が降ってます！なう

死にたくない男(2) (前書き)

ちょっとグロイですので注意を

死にたくない男(2)

地獄の入り口・地獄の3原色、修羅が青、餓鬼が赤、畜生が黄、これを混ぜると地獄の黒になる。

朔の夜、3人は××県に入り××村に向かった。××村の夜は静かで虫の音さへしない。

家は昔ながらの木造りの家が多く、そこから光が漏れることは無かった。

3人はその村の小さな神社への前にある黒い今にも折れそうな鳥居の前に立った。

「あと少しだ、あと少し・・・ゴホッゴホッ」

「旦那様」

浦戸の手に赤黒い血が広がる。

「大丈夫だ、あと少し・・・」

そして3人は鳥居をくぐった。

「つつ・・・」

突風を感じて目を瞑った。一瞬だったのですぐに目を開けると先

程まで目前に寂れた村が暗闇の中、広がっていたのにここは白黒の世界だ。

本当にあつたのだと嬉しくなつたと同時に一抹の不安を覚えた。

「旦那様、洞窟がこちらに」

指の先を見ると中が真っ暗で何も見えない洞窟があつた。その前まで2人の肩をかりながら歩いていく。

何故だか畏怖を感じた。

「入るぞ」

中に入るとすぐに黒い花を見つけた。花弁が黒く、雌しべが白い花だ。

浦戸が2人に指示を出して冷たい土を掘らせる。

「いいか、最後は私が抜く。お前たちは掘るだけでいい」

見た目と反してこの花の根は深く掘り出すのに時間が少しかつた。

だがやがて2人が根が見えるまで掘つた時、浦戸が抜いた。

「黒い花を摘んだぞ、灰色魔女クレア」

黒い服に身を包んだクレアが浦戸の目の前に姿を表した。服が暗闇に溶けて白い肌が一層際立った。

「その花を」

浦戸の手から花の茎を慎重に持つ。

「さあ早く」

永遠の命が手に入るなんて待ちきれない。

クレアはゆつくりとポケットから青い液体の入った手のひらサイズの瓶を渡す。

浦戸は一気にその青い液体を飲み干した。

するとすぐに浦戸の肌に赤みが増し、肌の色が良くなり、目の下のクマがとれた。

「ああ、永遠の色が・・・」

「ふふ、3人共、手が汚れるまで掘ったのですね」

3人の爪の中に変色した黒い土が入っていた。

「では、この洞窟から出ましょうか」

その言葉にやっと3人が動き出した。しかし4人が洞窟から出た瞬間、洞窟の中から何やら音がする。

「・・・何だ、この音？」

浦戸がクレアに問いかけるがクレアは何も答えず微笑を浮かべるだけ。

「旦那様、何か人が歩いてくるような・・・」

3人がはつとして後ろを振り向くと音の主が姿を見せた。

「なっ!?!」

「あれはいつたい!?!」

暗闇の中から姿を表したのは、どう見ても死体としか思えない人間。

後ろからずるずると歩いてくる。

その数、百は越す。

どれも肌が白く腕や足が切断されているのにそれらは身体の動きに合わせてついてきている。

「お、お前たちは!?!」

だがもつと3人を驚かせたのは死人は彼らが殺した人間であったことだった。

死体は身体を引きずりながら3人に詰め寄る。

ある者の首は皮だけでしか繋がっておらず、ある者は目玉が無かったり、またある者は両手両足が無く、胴体と顔だけで這いながら歩いていた。

浦戸は人間の血を浴びることにより生き長らえると信じていた。

だから彼らは身体中の血を抜かれた。

彼らの肌に血は一滴たりとも無い。

何も映してない表情が着々と迫る。

「く、来るな!」

だが無情にも死人は3人を取り囲む。

「助けてくれ!!」

浦戸が1人離れた処に佇んでいるクレアに助けを請う。

だがゾクリとした。クレアが残忍な笑みを浮かべているのだ。
口元は弧を描いているのに目元は冷ややかだ。

「あら、その方たちも助けて欲しいと何度もあなたに請うた？」

その笑みは残忍で美しい。

「こいつらとグルだったのか!？」

「グル? いいえ、私はある2人の願いを叶えただけ」

心外だと言うように肩を竦めてみせる。

死人たちが3人の腕や足を自分の身体に当てはめようと引きちぎる。骨の折れる音、皮が裂かれる音が響く。

「嫌だ!! 永遠の命を手にいれたんだっ!!」

「永遠の命? 私はあなたの病を治しただけですよ?」

穏やかなクレアの声色とその意味に言葉を無くした。

「そういう願いでしたでしょう?」

顎に手を当て考えた。おかしいですね、くす、微笑が浮かぶ。

「まあ、そんなことは大丈夫。永遠の命なんてすぐ忘れますよ。皆さん、あなた達には憎悪しかありませんから。生きたまま死ぬなんて素晴らしい残酷な殺され方ですね」

もはや意識を失いかけている浦戸に別れを告げ、消えた。

死にたくない男（2）（後書き）

ずるずる・・・こんな音が夜したら振り返らずにダッシュをお勧めします

死にたくない男（3）

家に戻り、優雅に紅茶を飲むクレアに黒猫が話しかける。

「あら、計画？クロウ、私は2人の願いを叶えただけよ。1人は病を治してほしい、もう1人は浦戸を殺してほしい、それだけでしょ」

だがクロウは楽しげに鳴く。

「そうね、あの屋敷の使用人になって死者の世界へ行く方法を教える。私も中々だったでしょう。でも考えれば分かるのにねえ、死者の世界へ行く方法を人間が知っているわけなんて無いのにね」

クレアがゆつくりと紅茶をすすする。

「そこまでして生きていたい世の中かしらね」

その言葉にクロウも黙る。だが行き成り静寂は破られる。

「・・・嫌な客が来たみたい」

その言葉と同時に扉が勢いよく開いた。

「よう、クレア」

ギリシャ神話に出てくるような彫りの深い顔、しなやかな肢体、波打つ黒髪、なんとも妖艶な男がずかずかと入ってきて、クレアの白い手を取り甲に口づける。

「それで、子閻魔様？」

「おいおい、相変わらずつれないな」

振り払われた手をさすりながら窓際にある鉢を見つけて窓に近づいた。

「なんだ、あいつらから得たこの花育ててんのか」

「その根や花弁に色々な使い道があるって知ってるでしょう」

「それにしても、よく知ってたな」

「ええ、残念だったわね」

洞窟の中にある土に直に触ると地獄から出られなくなる。あの土は死者の血肉で作られているから。

死者に触れると自分までその住人となる。

「どこかの大馬鹿さんは浦戸を殺すのを手伝え、とか頼みに来ながら何にも言わないなんてね」

「まあいいだろ。お前が地獄の住人になったら一緒に暮らそうと思っただけだからよ」

そう言ってクレアの耳元で甘く囁く。

「本当は親父が来るはずだったんだけどな。あいつら浦戸への憎しみが強すぎて抑えるのが大変だったから俺が来たわけ」

「あなたの父の方が数倍良かったわ」

「そついうなよ」

子閻魔がクレアの頤おとがを人差し指で持ち上げる。

「相も変わらず麗しい」

クレアの瞼の上に唇を落とす。

「いつもながら逃げないとはね」

「私とあなたが口づけを交わしたら夫婦めおとになるってこと？それは、あなたの父が嫌がるから無理って知ってるもの」

クレアが誘うように頤にかかっている子閻魔の人差し指をはずし、自らの唇に這わせる。

「そう、嫌がる相手に無理矢理強制するな、破ったら本気で不味いからな」

クレアがクスクス笑う。

「でも親父、本気でお前のこと気に入ってるんだぜ」

「残酷なところ？」

「・・・分別できるところだろ」

その言葉にクレアが笑うのをやめ黙った。

ニヤア、その時、クロウがタイミングを見計らったように鳴いた。

「ああ、そうね。子閻魔、等価を」

子閻魔が手渡ししたのは地獄でしか手に入らない黒い石。

まるで黒曜石のようだが、それとりもつと濃い色だ

「それ100年に一度しか取れない貴重な物なんだぜ」

この石は死者を生き返らせることが出来る石。

この石が悪用されないよう地獄で厳重な管理を行っているが、それをクレアに等価としてもちかけられた。

「あなたが浦戸を地獄に連れてくれば良かったでしょう」

「知ってんだろ、俺たちは死んだ奴しか連れていけない。それに死んだら思考は残らない、強い感情しか」

「ええ、だから人間は愚かなのよ」

しばらく沈黙が漂う。

「お前も気まぐれが多いな」

黒猫が隠れている暖炉の前のバスケットのを見つめる。

「そうね、今度から気まぐれ魔女クレアにしましょうか」

「いいかもな、って、やべえ。そろそろ帰ないと親父に殺される」

慌てながら扉の前で立ち止まって髪を靡かせながら振り返る。

「次こそは俺を愛させてやる」

そして去って行った。

「嵐みたいな奴ね」

クロウが同感と鳴く。

「ねえクロウ。気まぐれ魔女ってどう？」

不服そうに鳴いた。

「そうよね、灰色魔女の方がいいわね。それに今回は浦戸が死んで何百人という死者と閻魔様が納得したみたいだし」

クレアが残った紅茶を飲みほした。

「閻魔様が私を気に入る要素なんて一欠けらもないのに」

その言葉に窓際の黒い花が静かに揺れた。

死にたくない男(3)(後書き)

略して死にお、終わりです^皿^

死神の接吻（１）

とある都会の裏路地、誰も出入りしていないような閑静な場所。昼間だというのにビルの間にあるため陰鬱な空気が漂う。

そこにある『呪い屋』と書かれている電気もつかない、元は薔薇色だったのだろう塗装がごっそり禿げている看板。

その横に人一人入るかというくらい小さな扉がある。

そこにはこの世のものとは思えない程の男がいて、あなたの願いを叶えてくれる。

最近、職場や学校で有名になっている話だ。

だが人々は最後に言うのだ。見つけた人はいない、だってそれはただの噂なんだから、と。

今にも倒れそうな看板を見て緊張した面持ちで一人の女性が看板の横にある扉を開ける。

中に入ると暗く、足元しか見えない。だが人の気配がしたため、バッグを握る手に力を込めながら目の前の人物を見る。

ぼんやりとしか見えないが声の様子から若い人物だと思う。

女は勇気を振り絞って、自分の願いを言う。

「お願い、あいつを殺してほしいの」

別に人間など、どうでも良い。だが自分を生かしてくれるため行^やってやるに過ぎない。

だがもう十分だ、この先何百年も依頼を受けなくても生きていく気がしたが、もうほとんどこの仕事は趣味になっていたため辞めようと思わない、否、辞められない。

だって「ヒト」は欲深いから――

「カイ、行つてらっしゃい」

洋風の人形が黒いソファに身体を預けながらカイを見送る。
声に合わせて揺れる金髪にきよろきよろと動く水色の瞳が黒髪の
青年、カイをとらえる。

「・・・」

1LDKの部屋にはカイの旧友と可愛い人形がいる。昔から
カイを心配してくれる、今も心配そうな顔をしているナオに人形で
あるメアリが話しかける。

ナオは脱色して真っ白な髪をかきあげながらカイを見つめる。

「大丈夫、カイが優しく殺してくれるわ」

「・・・ああ」

けれど妙な胸騒ぎがやまない、それが何なのか分からないためナ
オは気をつける、と言えない。

カイは曖昧が嫌いだ、だから何か言う時はしっかり理由が無いと
聞いてくれないのだ。

そのカイは仕事をするため二対の目を見ずに出て行った。

男にしては長い黒髪を背中ですつと縛っていたカイは音も立てずに四階建てのマンションの一室に入った。

そのまま寝室に行き、ぐっすり眠っている今回の殺すべき松本まつもと晴の顔を見た。

いつもと変わらないこと、だが今日は何だか胸の中がもやもやとしている。

さっさと終わらせようと微かな笑みを浮かべている晴のベッドへと近づく。

幸せそうな顔をしている、だがもう・・・。

今まさに彼女の心臓へ触れようとした瞬間、

・バチンッ

手に鋭い痛みが走った。

「なっ・・・」

驚きと痛みで反射的に後ろへ下がると目の前に黒い物が現れた。ふわっと軽やかにカイの前に一人の女が下りてきた。

「あ、あなたは？」

驚きつつも冷静に目の前の女を観察する。

「クレア」

凜としていて艶めいている声だ。
その声は、すうつと闇にとける。

女はまだ20歳前に見え、肌は暗闇により更に白さを誇張し唇は熟した苺のように赤く、髪は闇に負けない程の輝きを保っている。

クレアは謎めいた微笑をしながらカイを見つめる。

「なぜ、ここに」

クレアは答えずに質問で返した。

「あなたは？」

「・・・」

沈黙が漂う。普段、冷静沈着なカイでもクレアから威圧的なモノを感じ冷や汗が流れる。

「私はこの女を殺しに・・・君は？」

「この女性を助けに」

静かな声でクレアが告げる。

どうやら自分の仕事を邪魔してきたようだ。見たところ魔女の服装だ、いやこの美しさは魔女のみがもつものだろう。

「私は灰色魔女クレア。あなたは呪殺師といったところかしら」

ただクレアと名乗る女は微笑むだけなので不気味だ。

また沈黙が漂う。

魔女に油断は禁物だ、力はどれほどなのか。
自分との力を推し量っていると「あら」とクレアが声を上げた。
クレアの視線を追うと足元に黒猫がいた。両目の色が違う猫だ。

「あら、クロウ。ついてきてしまったの？」

駄目じゃないと言いながら黒猫を抱き上げ腕で抱いた。

「何でいるの。．．あら、そうなの」

こちらを忘れ猫と会話しているようだ。

今の内に、と気付かれないように音も立てずに滑るように動く。

だが、動いた瞬間クレアがカイを見て視線のみで動きを封じた。

「私の仕事の邪魔をしないでいただきたいのですが」

「邪魔．．？」

クレアが小さく首をかしげる。わざとらしい動きだったが、それさへも優美に見える。

「あら、私は自分の受けた依頼を果たそうとしてるだけよ」

心外だわ、クレアが溜め息混じりに呟いた。

「譲っては頂けませんか？」

「女性が先ではなくて」

ということやはり、戦うより方法はなさそうだ。

死神の接吻（1）（後書き）

君は誰とキスをする？

私、それともあの子？

ふんふんふん（うる覚え・・・マクロスだっけ？）

死神の接吻（2）

普段のカイは依頼者にお守りを渡す。

このお守りを依頼者は殺したい相手にあげる、それを目印にカイはその家まで行く。

その人物の唇に死の接吻を施す、そうすると相手はただ甘美な夢を永遠に見続けるのだ。

だからカイは戦闘には向いていない、邪魔をされることなどほとんど無かったのだ。あつたとしても相手は人間で易々とまるで赤子の手を捻じめるように簡単に殺せた。

「シキ」

カイの使い魔である黒い狼のような形の靄がカイの足元の影から出てきた。

「クロウ、低俗な使い魔と遊んでおやり」

クロウがクレアの腕から飛び出しシキに毛を逆立て素早く部屋を出て行った。

残った二人。クレアは簡素なベッドに腰掛け晴の髪を梳いている。

「あなたは何と引き換えに仕事を引き受けたんです」

「・・・命30年分」

「まあ、たかが人間一人に30年、大層ですね。私は違うモノ」

本当に魔女か、先程断言したはずの答えに疑問を抱いた。
そんな困惑を嗅ぎとったのかクレアが答える。

「私が悪魔や天使だと？」

「・・・」

「天使というのはこういうこと？」

クレアの背の右側から白い純白の雄大な羽が広がった。

「悪魔というのはこれでいいかしら」

左から真っ黒な禍禍しい羽が現れた。

「なっ」

「私は灰色魔女。私たちの目的がぶつかり合うのなら仕方ありませんね。戦いますしょうか」

クレアが自身の白い羽と黒い羽を一枚ずつ取り手の中で握った。
手を開くとそこには灰色の小さな鳥がいた。

その鳥は窓から飛び立った。

「どちらの雇い主が先に死ぬか」

「っ・・・」

「大丈夫、あなたがこの子を優しく殺そうとしていたように私がその人を優しく殺してあげるわ」

くすくす笑い出す。まるで新しい玩具を発見した無邪気な子供のようだ。

まさか自分の仕事が邪魔される日が来るとは、初めてのことだ。

「先程言っていた、あなたが取引したモノとは？」

悔しさが言葉から滲み出ながら尋ねる。

淡く笑い、寝ている晴の枕の下から一枚の白い羽を出した。

「それは」

「そう、あなたが作ったモノ。依頼主にあげ、その子がこの子にあげたモノ」

ふふ、と白い羽に口付ける。その動作に何も言えず魅とれてしまう。艶っぽい唇に目が惹き寄せられる。

「戻ってきた」

唐突にクレアが言った。

窓から灰色の小鳥が戻ってきた。その嘴は赤黒く濡れている。

「私の勝ちね」

依頼主が死んだら受け取れないな。

前受金として命10年分を貰ったため、さほど残念ではない。

「そのようですね」

「クロウ、遊びは終わりよ」

すると黒猫がするりと窓から入ってきてクレアの足元にすり寄る。
「じゃあ、と鳴く猫がどことなく誇らしげに聞こえた。」

「すごいわね、え？あらやだ、ずっと羽を出したままだったみたい」

クレアの背から羽が消えた。

「シキ」

カイの足元に弱々しい姿のシキが佇んでいた。

「二日位で元に戻るわ」

それでは帰りましょうか、晴の髪を愛おしげに一房とり、口付けた。

死神の接吻（3）

クレアは晴の頭を一撫でして立ちあがった。
そんなクレアにカイは声をかけた。

「あ、あの」

「はい」

「また、会えますか？」

何を言っているんだろう。この魔女の美しさに魅入られたからと言って。

「いや、あの」

らしくもなくあたふたとしていると玄関の扉が開いた。
メアリを抱えているナオが駆け込んできた。

「遅いと思ったら何をしてるんだ」

ナオがちらりとクレアを見る。
見たこともない美しさに瞠目した。

「失敗した」

「えっ！カイがあ。どうしたのよ！？」

肩を竦めたけれど残念がっていないカイにフランス製の人形が耳をつんざく声で話す。

「ごめんなさいね、私がとってしまったの」

クレアが入ってきた2人を見た。

「クレアですよ。可愛いお人形さん」

「・・・クレア！？」

ナオが盛大に吹き出した。

唾が服にかかりマリアが汚いとまた喚いた。

「ナオは知ってるのか」

「ああ、噂だけだな」

「あら、どんな噂かしら」

クレアが顎に手を当て考えこむように悩む。

「俺が知る中で最強だよ」

「まあ、過大な評価をして頂いて嬉しいです」

にこりと幼げな笑みを残し、出会えて良かったと告げた。

「あつ」

思わずカイが言葉を発する。

クレアが苦笑しながら音も立たずにカイに近づく。

「また会いたいですか？」

「ええ」

クレアがマリアにすまなそうに微笑み、カイに近づき耳に唇を寄せる。

「・・・痛っ！」

カイがクレアの肩を押して離し、耳を押さえた。
鮮血が滴り下のカーペットに一滴こぼれ落ちた。

「何を」

「もう痛くないでしょう」

カイがベッド脇のドレッサの鏡を見てみると左耳に赤黒いピアスがついていた。

「これは」

「あなたが呼ぶのなら行きましょう。頼みがあるなら聞きましょう。願いがあるなら叶えましょう。ただし私が望む等価が払えるなら」

クレアがナオに抱かれているメアリに近づいた。

「ごめんなさいね」

そしてナオに視線を移し笑いかける。

「あなたの作る呪術も見なかったわ」

そして腕に抱えた黒猫と一緒に闇に溶けて消えた。

「・・・」

残された3人は呆然とする。

「カイ、あれって」

「・・・さあ」

美しい魔女に惹かれてしまった。

次の日、晴は目をゆっくり覚ました。

久々の熟睡だ、いつの間にか10時になろうとしている。

「昨日は嫌な夢を見なかったみたい。沙耶のおかげかしら？」

呟いて枕の下の羽を取り出そうとした。

「あれ、ない？」

どこにいったのだろう、毛布をひっくり返しても見つからない。

・・何か忘れてる気がする。

「まあ、探してる時は見つからないよね。それより先ずはご飯食べなきゃ」

賛成というようにお腹の虫が女子大学生らしかぬ音を出す。

朝と兼用の昼ご飯のためいっぱい食べようとパジャマ姿のままご飯を作ろうと立った。

テレビをつけ台所へと移動した。

鼻歌を陽気に歌いながら冷蔵庫を開く。

テレビの音が聞こえない程に浮かれていた。

「今日の深夜2時頃、部屋から悲鳴が聞こえ管理人が鍵を使って開けると上野沙耶さんの遺体が発見されたようです。胸には刃物のような物で刺されており部屋には鍵がかかっており、鳥のような灰色の羽が大量に落ちていた模様です。今後、警察は殺人事件として捜査を・・・」

台所から幸せそうな鼻歌がいつまでも続く。

死神の接吻(3) (後書き)

終わり、ちゃんちゃん

謎のまま終わらせる、これ虹乃風。

ただ説明がめんどいだけっすけどね(キラっ

ラン(1)

薄汚れた街の裏路地は薄暗く、ネズミが生きるに相応しい場所だ。捨てられ、邪魔者となったものにこそ相応しい。

「気持ち悪いんだよ！物乞いなら他でやってくれ」

15歳くらいの少年がでっぴらと太ったコツクの格好をした男に叩きつけられた。少年の細い身体は宙を舞い、壁にぶつかり呻き声が聞こえたが男は気にもとめないで厨房へと戻って行った。

倒れた少年は骨が見えるほど痩せているが、この辺りでは珍しい髪の色をしていた。泥で薄汚れてはいるが見事な白い髪だ。顔つきも貧困街に住む身としては整っている。だが、それらは全てまともに食事をとっていないために人相が変わってしまった子の前では意味のないものだ。

周囲の視線を浴びながら少年は立ち上がり、ふらふらと今にも倒れそうに歩く。

「ああ、せめて母さんの病気が治ったら・・・」

行く当てなど無い、だがここではご飯をもらえそうにない。だから歩くのだ、歩いて、歩いて食べられる物を見つけなくてはならない。

どのくらい歩いただろう、いつのまにか家のない場所まで歩いてきたようだ。

辺りは一本道、だが暗闇の中にぼわつと淡く光る一軒家がある。それは小さくて外見からして、ひどくもろそうだ。

仕方がない、あそこで何かもらえるといいんだけどな。優しいお婆さんかお爺さんがいてくれれば嬉しいのに。望ましい人物像を思い浮かべるがありえない想いを打ち消す。この世の中は甘くない、そんなのは自分自身が身をもって味わってきている。

ふらふらと頼りげ無い足取りで扉の前に立つ。

「『あなたの願い 叶えましょうか？ - 灰色魔女クレア -』・・・な
にこの貼り紙？」

魔女か、どんな怖い老婆なのだろう。骨まで食べられてしまうの
だろうか、それとも実験材料にされてしまうのだろうか。

でもいいや、もう疲れた。もう、僕は十分頑張ったじゃないか。
殺される前だ、きつと優しくしてくれるだろう。死ぬ前に料理を
たらふく食べさせてくれるように頼もう。

そう思つてゆっくりと扉を開けた。建てつけが悪いのか、ギギギ
と不気味な音を出しながら開いた。

ラン(1)(後書き)

すごい1ヶ月ぶりです
自分でもすっかり忘れてました・・・

ラン(2)

外見とは違つて広い内装に驚いた。家には薄暗くて天井まで見えないが本棚が周りをかこみ天高く伸びている。

「すご・・・」

「ありがとうございます。何か食べますか」

「わっ・・・!」

首が痛くなるほど上を見上げていたが不意に聞こえた凜とした声に顔を向けると暖炉の前で若い女が座りながら、こちらを見ていた。

「椅子にどうぞ」

暖炉の脇にあるテーブルに香ばしい匂いがするパンが籠の中に置いてある。

その匂いに頭が覚醒し、涎が出てくる。かつらばのお腹も悲鳴を上げているようだ。

「私はクレア。お若いのに疲れていますね」

クレアと名乗る美しい女は自分とさして歳が変わらないように見えるのに年寄り臭いことを言う。

暖炉の火で煮ていたシチューを掬い、クレアはテーブルの上に湯気が出ている皿をことりと置く。クレアもテーブルに移動し椅子に腰かける。

自分もクレアが座っている反対側に座り、目の前のご馳走に釘付けになる。

「そろそろ夕飯にしようと思ひまして」

黒いドレスに漆黒の瞳に腰まである直毛の髪、肌は透き通るくらい白いのに唇はまるで人の意吉を吸ったように真っ赤だ。

「どうぞ」

許可の途中だったというのに目の前の欲望には勝てなく、スプーンを取り一気にかっこむ。パンも貪るようにして食べる。生きていることを実感して涙が溢れてくる。

今回は何日くらいまともに食べていなかったんだっけ。泥が入った雨水を飲み、ゴミ置き場でカビの生えたパンの欠片を食べた。けれど空腹は満たされなくて、心も空っぽになって。

「そんなに急かさなくても取る人は・・・あつ、クロウ!」

目の前を黒猫が通り、籠のパンと盗んでいった。

ちらりとこちらを見た目は違う色をしていて何とも不気味だ。

「こら、駄目でしょう。ごめんなさいね」

黒猫の代わりに謝るが元々これらはクレアの物だ、謝る必要なんてない。それどころか、こちらがクレアの夕食をとってしまったことを詫びなくてはいけないのだ。

「ごめんなさい、あなたの夕食を取ってしまったて」

「いいんですよ、だってこれは来客用ですもの」

赤い唇が弧を描いて、その唇に目が離せない。

「どうして、そんなに優しくしてくれるんですか?」

「ここから追い出されたいの?」

「
・
・
・
」

今は何にかえても食べる物が欲しかった。

ラン(3)

しばらく無言で焼きたてのパンと温かいシチューを食べていると、だんだんと腹が満たされてきた。

そのため食べる速度を遅くして、こつそりと目の前の魔女の様子を窺う。

頬杖をつきながら暖炉の燃え上がる火を見つめている彼女の顔が火に照らされていて、なぜか分からないがぞくりとする。哀愁が漂っていると言うのだろうか、憂いを帯びている瞳は微かに閉じられていて、目が離せられない。

そんな視線に最初から気付いていただろう、口元に笑みを浮かべながらゆっくりと向き直る。

「ああ、そう言えばお名前を聞いていませんでしたね。こちらはクロウ、あなたは？」

黒猫に視線をやりながら名前を問う。

「ランです」

「では、ラン。あなたの願い、叶えましょうか」

その言葉に勢いよく顔を上げる。クレアの光を映していない瞳とぶつかる。

「なぜですか」

「なぜ、とは？」

「あなたはなぜ願いを叶えようとするのですか？」

「・・・」

最初は眉を顰めて質問の意味を理解しようとしていたが、次に言ったランの言葉にぴたりと動きを止めた。

黙っているクレアを訝しげに思い、その動くことがない表情を観察する。その時、気のせいかもしれないが一瞬だけ、クレアの表情は悲しそうで泣きそうだったように見えた。

だがすぐにその顔は伏せられた。その仕草までもが妖しげで妖艶だ。

「あの・・・」

「失礼、私はただの物好きな魔女ですよ」

上げた顔には何の感情も見えなく、淡々としていた。

「あなたの願いはあるのでしょうか」

「はい」

こちらが何も言っていないのに決めつけるような言い方だ。しかしクレアの言い分は合っているため何も言い返すことができない。

「それは？」

「母の病気が治って欲しい」

「叶えてあげましょうか」

クレアはどうしてランの母が病気になったのか、どのような症状なのかは一切聞かない。ただ、聞くのはランが、その願いを叶えたのか、叶えたくないのかだけだ。

「その代わりは、僕の命だと、か」

そうしたら母の面倒は誰が見るのだろうか、ああ大丈夫だ。僕には厳しい義父だけれど母には優しいのだから、きっと世話をみてる。

「さあ、どうかしら。きっと違うでしょう、それはあなたの願いに合ったものだから。それが金でも物でも人でもいいのです」

「僕には何もありませんよ」

「いえ、必ずありますよ。人の命よりも儚いものが」

意味ありげな顔をするクレアに恐怖を感じるが、命よりも大切なものなんてこの世にあるのだろうか不思議に思う。

「それは？」

答えを求めるがクレアは笑っただけで答えてくれない。

「あなたの願い、叶えましょうか」

燃えていた木が爆ぜて、暖炉の火が激しく燃え上がり赤く染まっていたクレアの顔を一層際立たせた。

ラン(3)(後書き)

鼻水、たらり、くしゃみがはくしょん、はくしょん
一日二回のお薬で止めましようね

鼻がー！

ゴミ箱いっぱいティッシュの山ができた

ラン(4)

ランは考えることなく、クレアの質問にすぐさま答える。

「ええ叶えてください。母だけは幸せになって欲しいんです」

「母だけ？」

クレアが不思議そうにランを見たが、その仕草が幼く見えて可愛らしかった。

「今の父は僕の父ではないんです」

「ああ、再婚ですか」

「ええ、母が僕を生んですぐに父は事故で亡くなってしまつて。一人で僕を育ててくれた母は病になる前に今の義父と出会つて幸せそうなんです。僕とは馬が合わなくて。母が見てないところで暴力を」

ランは暴力を受けているというのに同情を買つような声色は一切なく、ただ事実を淡々と述べているだけであつた。

「母が寝込むようになってからは、だんだんと酷くなってきて」

色あせた服の薄い生地から伸びる手足にはいくつもの青あざと火傷のあとが見られた。この分だと腹や背中にはもっと大きな傷などあるのだろう。

「義父も働いていて、お金は十分にあるんですが母の病気は一向に治る気配がなくて」

「あなたの母の病が治ったら家に戻りたいですか？」

「いいえ、母には幸せに生きて欲しい。僕は手枷になりたくないんです」

ランが思いつめた顔で溜息を吐きだし、顔に影を落とす。白く細い手で自身の髪をかきあげた。

「僕が生まれてこなかったら、もっと母は幸せになれたのだろうに」

「あなたの願いを叶えましょう」

唐突にクレアが言う。

「あなたの母の病を治す。等価はあなたに関する思い出をあなたの母から頂きましょう」

「思い出？」

「ええ、それで病を治しましょう」

ランは暫し口を閉じたが、決心してクレアの瞳を真っ直ぐに見つめながら意志をはっきりと口にだす。

「お願いします」

「ただいま」

ランはあちこちに穴が開いて隙間風が入る我が家に戻り、静かに母が寝ている寝室へと入る。

どうやら義父は酒を飲んでいて寝てしまったらしく、母のベッドの下に酒の瓶を片手に持ちながら転がっている。踏まないように近づいて母の苦しそうな顔を見る。

「クレア」

小さく呟くとランの後ろに物音一つたてずに現れた。

「この薬を飲ませなさい」

手に持っていた瓶をランに手渡す。

中の液体は黄色みがかかっていてどろりとしている。得体の知れない液体を母に吞ませても大丈夫なのだろうか。

「害などありません」

そんなランの様子を察したクレアが先回りして言う。

ランは恐る恐る母の頭に手を回し、閉じられた口を開いて液体を流し込む。蓋を開けた時に異臭がしたがそのまま吞ませる。最初は顔を顰めていたが、ゆっくりと嚥下し始めた。

「もう平気でしょう。では等価を頂きます」

クレアが人さし指をランの母親の額につけて何か、唱えはじめた。その詞はランには理解できないものだったが淡く発光する母を見て、記憶が奪われているのだろうとその行為をじっと見続けた。

そしてクレアがずっと指を離して、身を起こした。

「も、もう・・・？」

クレアが首を縦に振り、ベッドから離れて遠ざかる。

「母さん・・・」

ランが母の手を握り、苦しい表情は消え、呼吸が一定のリズムになっていくのを確認すると、その手を布団の中へ戻して肩まで布団をかけなおす。

ラン(5)

ランがベッドから離れようとした時、義父が目を覚ました。

「う・・お前、何でここにいる! ! ! ・・それにお前は誰だ! ? 」

全身、黒い衣装を纏った妙齡の怪しげなクレアを指さして警戒しながらもランに掴みかかった。

「お前、戻ってくるなと言っただろっ」

「騒がしいですね」

クレアが苛立たしげにランの襟首に掴みかかっている男の太い手を取って、首から離して指をさす。

「眠ってなさい」

まるで事が切れたようにその場に崩れた。クレアは巨体が倒れてくるのを避けたため義父はベッドの角に頭をぶつけ倒れたが、そのまま豪快な鼾をかいて熟睡しきっている。

「今の」

ランがせき込みながら倒れた義父をそれを冷たい眼差しで見つめるクレアを交互に見る。

「・・・あら、誰かしら」

不意に第三者の声が隣から聞こえた。

「母さん」

だがベッドから身体を起こした彼女は首を傾げてランを見つめる。

「えっと、私、子供を産んだ覚えはないのだけれど。でもあなたは何だかすごく身近な人のような気がするわ」

ランが驚いたように目を見張る。

クレアは無表情にその遣り取りを見守るだけだ。

「そうでしたね、すみません。でも一言だけ・・・母さん、今まで育ててくれてありがとうございます。あなたがいたから今の僕がいられる。だから母さんも幸せになってください、いつまでも愛しています」

そう言って、もう振りかえることなく家を出て行った。

残された彼女は知らない人が出て行くのを見ながら、何故か胸が締め付けられるのを感じたが何故そのように感じる自分がいるのか分からない。

「誰だったかしら・・・思いだせないわ。でも・・・あら、何で涙が？嫌だ、おかしいわね」

だが次から次へと溢れ出てくる涙は止められなかった。

「良かったのですか？」

「ええ」

家を出て裏路地へと向かったランの後に続き、クレアがその背中に問うと肩が震えたがランは振りむいて無理矢理な笑顔を見せる。

「これから、どうするのですか？」

「・・・」

「まあ、人の命は短いのですから足掻きなさい」

ランの明日など、どうでもいいように言い、その笑顔に背を向けて立ち去ろうと足を踏み出す。

だがドレスの裾をランが掴んで歩みを止めさせる。

「何です？」

「僕をあなたの家に住ませて下さい」

クレアは溜息について振りかえる。そして真摯な瞳とぶつかるのを避けながら答える。

「私がいるところは悲しい場所ですよ」

「ええ」

「私を憎むようになり、人間に絶望することになるでしょう」

「それでも」

お前は分かっているかというように首を振る、お前は知らないだろう。ニンゲンというものを。

「私は出て行くな、とは決して言いません。私のところが嫌になったらいつでも出て行って構いません」

説得を諦めたクレアは自分についてくるよう手を振る。だが手は差し出さない、手を掴んだら最後だから。

「僕は一生、いますよ」

「一生なんて言葉はない」

「あります」

反論するランを見もしないで歩きだす。
その隣につくランと一緒に暗い、暗い闇に溶けて消えた。

ラン(5)(後書き)

次のネタが思い浮かばない・・・
なんか散歩でもしようかな

欲張りな女

あたしは何でも欲しい。

綺麗な服に素敵な彼氏、頭も良くなって、美味しいご飯も大好き。有名人にも憧れるしなってみたいと思う。

だから普通な両親なんていない。

なんでお金持ちの家に生まれなかったんだろう。そうすれば目いっぱい甘やかしてもらえたし好きな物も買ってもらえた。しっかり英才教育をして素敵な人にも巡りあえたはずなのに。

現実 is 厳しい。

あたしは軽い財布を振り回しながら、ぶらぶらとネオンが光る夜の街を彷徨い歩いていた。

最近 is 両親も何も言わなくなった。

初めの頃は夜遊びばかりして就職先すら探そうとしないあたしに口酸っぱくしていたけど最近ではもう諦めて、あたしの妹に託したらしい。

妹の美咲^{みいさ}は勤勉であたしが見る度に机に必死にしがみついている。あたしが馬鹿にしても笑うだけでつまらない。親の期待を背負って、も裏切ることなくちゃんとした成果を収めていた。

馬鹿らしい。

そんなに頑張ったところで未来が確実なわけがないし、努力なんて無駄だと思う。

最後は金を持った人間だけが勝ち残るのだ。

「はあ、生まれ変わったら絶対、お金持ちの家に生まれてやるんだから」

あたしは酔おうと近くのバーに入った。

マスターに止められて店から追い出されるまで飲んだ。

どうやら飲みすぎたらしい。

何も考えられなくなつて、どこを歩いているのかも分からない。

ふらふらと勝手に足が動くのをまるで他人事のように見ていた。

そうすると一軒のぼろい家が見える。

人通りも無くなっているのを見るとどうやら街のはずれにきてしまったらしい。

今あるマンションや普通の家とは違う赤い屋根の家になんだか笑

いが込み上げてくる。

どんな人が住んでいるのだろうかと家を覗こうとドアに寄った。

「あなたの願い、叶えましょうか？ 灰色魔女クレア・・・ぷ、何よこれ」

魔女ならともかく灰色魔女とは何なのだ。

おかし過ぎて火照った身体は笑いを求める。

「あはは、どうしよう。お、おかしすぎてお腹がい、痛いよ」

暫く家の前で笑い続けていると扉がギイと音をたてて開いた。

まるで入って下さいと言わんばかりの扉に気分をよくして勝手に入る。

「ごめんくださーい。願いを叶えてもらいにきましたあ」

大声で中に入ると目が点になってしまった。

外から見た時は小さなボロ家だったの中は凄く広い。周りを見渡すと本棚が壁を覆っていて天井すら見えない。

普通に考えればおかしいことなのに酒により思考回路が奪われている今となっては全てがおもしろい。

「どうしよう、凄いいんだけど。あはは、天井がなーい」

「・・・いらつしゃい」

艶のある声が出たと思ったら暖炉の前に、まるで人形のように綺麗な人がいた。

暖炉の火で光っている白い肌は一層際立ち、動かない黒炭のような瞳は自分を見つめていた。だが膝に座る黒猫を撫でている細い手が動いていることで女が生きていると分かった。

「あら、綺麗な女の子ねえ。肌も綺麗だし、羨ましいわあ」

「まあ、どうも。あなたも酒で乱れた姿が鬼女のようにすばらしいですね」

「あははは、あんたおもしろいわねえ」

「それはそれは光栄です。私は灰色魔女、クレアです。あなたの願い、叶えましょうか？」

女の瞳が鋭くなったのに気付かずに『願いを叶える』という言葉のみに反応する。

「本当！？あのね、あたしね綺麗な服に美味しいご飯、それに良い頭を持って、お金持ちの家に生まれたたいわ。あ、素敵な彼氏も欲しいし」

途端に興奮する女にクレアと黒猫は目を見合わせて、にっこり笑い合う。

横でぶつぶつと自分の好きな物を上げる女を横目に一人と一匹は会話をする。

「あら、それはいい考えね。クロウもそう思うの、私もよ」

笑いを含む鳴き声でクロウが反応する。

「え、そんなのじゃ生ぬるいかしら。充分だと思っわ、きっと彼女も満足するでしょう」

そう言うと、まだ指を折りながら自分の願いを言い続けている女にクレアは悠然と笑う。

「あなたの願い、叶えましょう」

その言葉を聞いた瞬間、女の意識は真っ暗闇の中に消えた。

道路の脇で一人の俳優の新太郎しんたろうが髭を生やした監督と話している。今、売れっ子の新太郎は初めてのドラマで主人公の役をもらっていて不良生徒の咲哉さくやの役だ。

咲哉は幼少期に親に暴力をふるわれて心に傷を負っていて不良となり、周りに友達と呼べる人もいないが咲哉が道で拾った犬をきっかけに心を開いて友達をつくっていくという話だ。

「このシーンはこうで、ここに愛ちゃんを使いましょうよ」

「そうだな、じゃあ、このシーンをもう一度やろう」

その言葉でカメラが動き、準備を始める。

「オッケー、はいスタート」

その声に新太郎は枯葉が舞い落ちる道を歩く。落ちゆく色とりどりの葉を見つめていると後ろから声がする。

「咲哉、ありがとう」

その言葉に振り返ると犬を抱えている綺麗な女の人が親しげに笑いながら手を振る。

それに答えるように手を振ると犬が女の腕から抜けて、咲哉に駆け寄る。

白い毛並みの整った犬を抱きかかえて顔を合わせると犬は嬉しそうに咲哉の顔を舐めまわす。

「愛ちゃん、おいそんなに舐めるなよ」

「はい、カット。いいよ、休憩入ろう」

一段落ついたところで新太郎が犬の愛ちゃんを抱えながら台本を読みなおしていると影がかかった。

「新太郎さん、お疲れ様」

「美咲、ありがとうな」

「ううん、新太郎さんと愛ちゃんが頑張ってるのを見るのが好きだもの」

新太郎は甘えた声を出す愛ちゃんをそつと下ろして自分の妻である美咲の腰を掴む。

照れる美咲を愛おしく思いながら足に寄る愛ちゃんを見る。

「全く、こいつは。賢いのに贅沢な食事をするし、毎日違う服じゃないと怒るなんて」

そんな新太郎の呟きにワンと愛ちゃんは嬉しそうに答えて尻尾を振る。

「まあ、いいじゃない。それにしても本当にお姉ちゃんにそっくりだなあ」

「だからその名前にしたんだろう」

「違うよ、お姉ちゃんを忘れないようにだよ」

美咲は苦笑して新太郎の脇にちょこんと座る。

そして新太郎がいない時にかみついてくる犬に触らないようにして、新太郎の肩に顔を乗せる。

「あたし、幸せだなあ」

「当たり前だろ、俳優の新太郎の妻なんだから」

そうね、新太郎は2人が生活するのに充分に稼ぎ、性格も良い。初めて会った時も努力家の美咲を褒めてくれた。

そんな新太郎は大好きなのだが、ふと足元に視線を下ろすと睨んでいるような顔をした愛ちゃんと目がぶつかる。

「うっ、愛ちゃんに嫌われているような気が」

「大丈夫だって。それに愛ちゃんは手間がかかるけど優秀だろ」

「そうだけど・・・ね」

「それに医者に言われただろう。愛ちゃんは少し寿命が短いから大切に করতে」

「そうね」

美咲はじつと動かない愛犬を見ながら夫の腕に抱かれた。そんな2人を見つめるのは黒い円らな瞳だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0581q/>

灰色魔女

2011年6月7日01時26分発行